

**講演概要 筑波大学特別支援教育研究センター・  
障害児教育関連センター連絡協議会共催セミナー  
平成27年3月27日(金) 退職記念講演「聴覚障害とこ  
とば/ケニアと特別支援教育」**

著者	四日市 章
著者別名	YOKKAICHI Akira
雑誌名	筑波大学特別支援教育研究
巻	10
ページ	141-149
発行年	2016-03
その他のタイトル	Compendium of the Lecture : Topics on Hearing Impairment and Language, and Special Education in Republic of Kenya
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00144511">http://hdl.handle.net/2241/00144511</a>

筑波大学特別支援教育研究センター・障害児教育関連センター  
 連絡協議会共催セミナー  
 平成27年3月27日（金）  
 退職記念講演「聴覚障害とことば／ケニアと特別支援教育」

筑波大学人間系教授 四日市 章

## I 聴覚障害とことば

### 人間の機能

人間はきわめて複雑な環境の中で適応的に生きていくために、限られた能力を活かして、どのように考え行動するのであるか。

人間は、情動を原動力とし、外界に対して最大限に思考を巡らしながらも、ほぼ自動的に対応していくように思える。自分で意識して考えているようだが、そうともいえないようにも思う。行動の背景には、効果的な行動を発現するための、推測や推論による外界の認知が基盤となっている。認知の機能は、言語の機能と相まって一体化している。また、人間の能力には、外界全体をうまく把握できず、一部しか把握できないという制約がある。

### 聾教育とことばの問題：歴史的な課題

聴覚障害児は、ことば（日本語）の獲得がうまくいかない。どうやってことばを獲得させればよいのか。これは、我が国では百何十年、さまざまな時代背景の中で多くの先達に取り組んできた課題である。子どもは、教えたことばは覚えるが、そのことばを自分の気持ちにそって自由に使うことが難しい。これは聾教育の歴史の中で、繰り返し言われてきたことである。効果的な言語指導法の探求は聾教育の最大ともいえる課題である。その解決に向けて、実践的、研究的な試行錯誤が繰り返され、また、言語学や心理学の知見も合わせ、現在でも研究が続けられている。ことばは、教え込んだり記憶させたりするものではないことは分かってきている。では、ことばとは何なのか、どう指導すればよいのか。これは、私にとっても解決できない大きな問題でもある。しかし、言語指導を考えるときには、ことばは何かということを考えざるを得ない。

### 言語と人間：人間の行動と効果的情報取得

人間は言語を使ってどのように考えるのか。なぜ言語を使うのか。人間の基本的な特性として、外界

を的確に捉えて効率よく対応し、生きていきたいということがあろう。しかし、自然や社会という外界は非常に複雑、多要因であり、人間は外界の全部を上手に理解し、すっぽり取り込むだけの能力を持っていない。神様ではないので、ごく一部しか見えない。では、見えないものをどうやって捉え、将来を予測すればよいのか。外界をどう捉えれば、自分の行く先々をうまく予測できるのか。そのためには、外界を圧縮して取り込むしかない。自分にとって、都合よく必要な情報を選択的に取り入れて利用する。情報のうまい保存と取り出しに、ことばというものが活用される。

### 言語というラベルの利用と効率的推測

人間は、外界の情報の一部に着目し、それを切り出して記号とする。それを基に事象の全体や先のことを推論する。推測や推論をうまく行うためには、枠組みが必要である。外界を無秩序に見回し、取り込んでいたら、外界把握はできない。状況を把握して次を予測するには全体構造の把握が必要となる。個別の単語カードをただ集めるだけではなく、カードの整理棚が必要となる。この働きを担うのが、言語、ことばである。言語自体が、整理棚とカードの機能を同時に持っている。カードをどのように集め、整理していくかは、自然の法則や社会・習慣・文化の制約、また、人とのコミュニケーションの影響を受ける。

### ラベルを作る：記号化のメリット

目で見たもののイメージが、表象として頭に残る。その時々映像として残っているものを、頭の中に固定しなければならない。表象にラベル・ことばを付けるとそれが固定する。固定化された表象が組み合わせられ、言語として、意味や概念が作られる。さらに、できた概念を、またラベルとして固定し、それらをさらに組み合わせ、より高次元概念をどんどん作っていく。イメージや概念の可視化や安定化

に、ことばというラベルが非常に役に立つ。一時的な視覚的な表象や捉えどころのない心情も記号に変えて、さらにもっと抽象的な内容を含む記号に変えていくことができる。一方では、既に獲得した概念やそれらの相互関係に合うように、知覚や認知が方向付けられ、新たな対象が理解される。

### 認知の発達と知識の構造化

事象間の関係のように直接見えないものも、どんどん記号化・ラベル化する。これによって、概念の構造（枠組み）が、より論理的な認知の道具となり、環境認識の仕方も、拡大・精緻化し、見えないものを論理的に推測しながら外界の認知をすることができるようになる。そういうことを繰り返し、ラベル（ことば）を使って、複雑な外界を自分にとって使いやすいうように、頭の中に再構築する。しかし、ことばは事象の一部を切り出して、論理という糸で結んだもので、外界そのものではない。自分が頭の中に作った外界が、現実とうまく対応しているか、多くの人々が共通してもつ認識に合致しているかが、自分の作る外界をうまく利用できるかの鍵になる。優れた知識の構造化は、思考や推論の便利な道具になり、現実合った予測を速やかに導くことができる。思考や推論が効率化すれば、適応的な行動がとりやすい。一方、構造化された知識と現実とがズレていると、思い違いや考え違いが起こりうまく外界に対処できない。もっと進むと心理的な障害も生じ、自分の思っている世界が現実で、世の中が違っているとなる。

### ことば（ラベル）って何かな？

ことばを用いてどのように外界を切り取り、構造化していくか。ことばを使いながら覚え、覚えながら使う。経験を基にして外界を切り取っていくので、その中には個人の偏りが入り込む。ことばはある種の偏りを持った意味や知識のかたまりと言わざるを得ない。ことばを使って何を知覚、認知するのか。知りたいものや知っているものをうまく認知する。自分自身が納得できる必要があるので、個人差が生じる。大人と子どもでは納得の仕方は違うが、本人がそう思ったら、それが自分にとっての真実になる。

ことばは頭の中でどうなっているのか。ことばの特徴を垣間見て想像する一つのサンプルとして、記号化の仕方や外界の特徴の切り出し方という観点でことばを見ていくと、非常におもしろい。

### 連続し、変化する外界を、どうやって切り分け・切り取るか：記号化

青いものや固いもの、丸いものといったように、色や形等の特徴に着目して切り取る仕方がある。また、牛とミルクといった因果関係、サルとバナナといった連想関係で、外界を切り分ける。ボールでも石でもチョークでもゴミでも、ある行為に対して「投げる」という一つのことばで切り出す。そのときには、それらの個別の属性を捨てて、「投げる」ことだけに着目できるということが、ことばのすごいところである。玄関、改札、門、大きな箱も「入る」であるし、人でも犬でも自動車でも「入る」だ。特定の行為だけを取り出して、個々の事象に伴う他の属性を全部捨ててしまう。数の場合は、あめ1個とあめ2個は違う。しかし、あめ2個と家2軒は同じ。あめと家と同じだと認識すること自体がすごい。

### 状態の違いでの切り取り

「水の上に人がいる」状態を想像してみよう。その人が、泳いでいるのか、浮かんでいるのか、漂っているのか、溺れているのか、流れているのか、これらのことばは、その状況によって動きを切り分けてラベルを与えている。鳥が「飛んだ」「飛んでいる」「飛ぼうとしている」も、状態による切り分けである。人はいろんなものを「作る」が、家は「建てる」、セーターは「編む」、鶴は「折る」、洋服は「縫う」、ケーキは「焼く」など、同じ「作る」でも対象によってことばを変える。「入れる」も、状態やものに依じて「注ぐ」「しまう」「詰める」「挿す」「よそう」などを使い分ける（左藤敦子・筑波大学博士論文）。屋根、壁、窓、ドアがある同構造の物について、「建てる」と「作る」をどう使い分けるか。ビルは「建てる」、一戸建ての家は「建てる」、物置は「建てる」。では、大型犬の犬小屋や庭にある小さな立派なお宮は、「建てる」か「作る」か。小さい犬小屋や模型の家はどうか。これらは、その構造は同じだが、どこかで使い方を切り分ける。我々は、これらの使い分けのルールを知らなくても、使い分けられる。これがことばの一つの特徴である。

### 文脈の違いと切り取り

文脈に応じた切り取り方の違いがある。「とる」ということばは、写真を撮る、音を録る、機嫌を取るなどたくさんあるが、それぞれの状況によって意味が異なる。我々はこんなに多くのことばを、どうやって覚えてきたのか。我々が知っていることばを

列挙したら、とんでもない量のものが頭に入っている。混乱しないで使えるのが、不思議で仕方ない。

### 状態と表現

「みる」「みえる」「みかける」「みばえ」「みてくれ」「みつめる」「みまわす」「ながめる」「みまもる」「みおとす」「みすごす」などは、すべて基本的な語彙であるが状況で使い分けができる。聾学校の子どもにこれをどう教えるかということは、究極の問題である。

### 人の意図によって切り取る

形の似た「机」と「棚」の違いが、ネコに分かるか。我々は、机と棚をどう区別するのか。「その前で人がある程度の時間、座るか立ち止まるかして、その上で何かをする、床と離れている平面」と机を定義すると、我々はある程度納得するが、机を見てこんなことを考えているかどうか（鈴木孝夫「ことばと文化」、岩波新書）。このように、人の行動や意図によって決まる切り分け方もある。

### 何でも切り取る

見えないものでも、切り取ってことばを作り出せる。抽象概念である「平和」や「健康」などは、中味を具体的に理解しているだろうか。我々は「愛」「憎しみ」「不安」「優しさ」「夢」「希望」「永遠の愛」といったことばを普通に使うが、内容をきちんと説明できるだろうか。「愛」とは何かというと哲学の問題になるが、一定レベルのコミュニケーションのできるラベルとして便利に使っている。抽象的なことばは、文化の影響が大きい。

### 教科学習での切り分け：知識の整理

教科学習の中では、階層や系統的な分類で事象を切り取っている。「犬、動物、生物」「地球、惑星、太陽系、銀河系」「地理、歴史、公民」「自然数、整数、有理数、無理数」など、分類のかたまりである。学問は人類が分類してきた成果であるともいわれる。文化的な影響も非常に大きい。理系や文系という分野によっても切り取り方は違う。

### 切り取った概念のつながり：ネットワーク

切り取った概念はばらばらではなく、頭の中で、いろんなつながり方で全部つながっている。心理学でよく言われていることである。

### 「ことば」とは：まとめ

「ことばは、混沌とした、連続的で切れ目のない素材の世界に、人間の見地から、人間にとって有意義と思われる仕方で、虚構の分節を与え、そして分類する働きを担う。言語とは絶えず生成し、常に流動している世界をあたかも整然と区分された、ものやことの集合であるかのような姿の下に、人間に提示してみせる虚構性を本質的に持っている。（鈴木孝夫、前掲）」ことばは虚構の世界を、自分の頭の中に、その人に有意義、役立つと思われる仕方で、作りやすいように作っている。そうした性質を、ことばは本質的に持っている。

### 学習と経験

ことばの意味を、ある音声（記号）形態との関連でもっている、体験と知識の総体だと考えると、体験に伴う情動の重要性が認識される。情動は思考や学習を推進し、方向付ける。経験の違いは、ことば（ラベル）の中味（意味）の違いをひきおこす。どう使ってきたかで、概念の内容が異なる。同じ「りんご」でも、子どもは経験から「赤くて食べたらいいしくて」と言うし、ある子は「ウイリアム・テルに出てくる」とも言う。果物屋さん「どのりんごが旬で、値段はどうか」、料理人は「どなりんごが、どの料理の付け合わせによいか」、画家は「誰だれが描いたりんごが素晴らしい」など、自分の経験にそってりんごの意味をイメージする。生活の中で、ものを考えたり感じたり伝えたりする経験、また、考えなければならぬ状況に置かれることで、ことばの意味が広がり、中味が深まっていく。ことばを使う必要性が本人の中に生じれば、そこで新たなことばの意味が習得される。

### 教師の意図と子どもの思考：ことばを使った意味のやりとり

教育の場でよく問題になるが、教師はまずことばで教えようとする。しかし、教師が使うことばについて、教師の持っているイメージや伝えたいと思っている内容と、子どもがもっているイメージや意味は必ずしも同じとは限らない。扱われている単語に関する意味や経験の深さが、教師と子どもとは違う。どういう状況で、その言葉の意味のどの側面を扱おうとしているか。教師の指導意図と子どもの思考過程は同一かどうか。記号（ことば）の中味や使い方の違いを意識しなければならない。これは、聞こえる子であっても同じである。聾教育では、この

違いをたえず意識して、子どものもっている概念の中味を確かめながらやりとりをする必要がある。

### 子どもが使う記号と中味

聾教育でよく問題になるのは、手話か、口話かといったコミュニケーション・モードである。どちらがいいのかという論争は、ずっと続いているが結論が出ない。長い歴史にも係わらず答えが出ないということは、どちらも必要ということだと思ふ。今は、幼稚部の段階から、手話や口話という記号が混在している。混在の状況もさまざまなので、状況はとても複雑になっている。先生や子どもが表出し、外から見える記号と、子どもが頭の中で使っている記号やそのシステムは同じかどうか。声を出しながら手話を使う場合も、音声との対応の質や量のようにさまざま。ある先生は声を出さずに手話を使っているが、日本語との対応はどうだろうか。先生が出す記号を、子どもはどう受け取り、頭の中にどう体系化していくのか。それは、子どもが、自分でも分からない間に選び、作られていく体系であろう。先生が使う種々のコミュニケーション・モードを、子どもがどういうバランスでどういうふうに混ぜながら意味を取り出すか。どういう記号システムが子どもの頭の中に作られているかは、外からは見えない。手話、口話、聴能、手指などの記号が、子どもの頭の中でどのように組み立てられているのかは、明確ではない。

### 教育とことば

ことばの意味は経験と知識の総体であり、経験と知識を構造化するのは、子ども自身である。どう記号化するかは、自分にとってどんな利益があるかを、子ども自身が感じ、納得しながら、知らず知らずのうちに、気持ちや思いに押されながら決められていく。子どもが一步一步、自分で、自分なりに意味を理解し納得しながら枠組みを作っていく。意識しているかどうかに関わらず、子ども自身の判断で作っていく世界がある。赤ん坊が一口ずつ食べてだんだん大きくなるように、ことばのやりとりを一つ一つ積み重ねて、頭の中に言語が作られていく。

### 言語のもたらす制約

言語は便利な道具だが、基本特性として、外界の一部の特徴を切り取って、点と線で外界の略図を頭の中に再構成している。したがって思考の面での制約ももたらす。外界の一部を取り出すということは、

残りの多くを捨てているのだが、本人も何を捨てているのかに気付いていない場合が多い。言語は、特徴や要点を把握するにはとても優れているし、特定の目的の明確化と達成に対しては非常に便利である。しかし、優れたテストでも、人間全体を評価できないように、複雑な事象の本質や事象の総合的な把握が難しいのがことばの不便なところである。自分の理解と現実との乖離が生じることがある。日常生活での、思い違いや行き違い、さらに、認識のズレが昂じて病気になる、世の中をありのままに捉えられなかったりすることも起きる。研究を進める時も、誤解や見解の相違、思い込みが生じる。研究仮説は、事象の構造の特徴を捉えるには優れた道具であるが、現実の事象との対応を常に確認しながら考えていかないと、論理が現実から遊離していく。こうした現実とことばとのずれはとても生じやすい。聾学校の指導では、歴史的に、先生は何度も子どもに言葉の意味を確認することを重要視してきた。小学部の授業での先生と児童のやりとりを見せてもらった。私は、子どもは先生の言うことが分かったのだと思うのに、先生はまだ聞き続ける。すると、やはりきちんと分かってなかったということが明らかになった。ことばの中味の違いをどのように取り出し、意識させて子どもに納得させていくか。そこが聾教育の専門技術だと思う。

### 認知や行為での自動的機能

人間の行為はかなり自動的に行われており、どうやっているか本人には分からない。目的が決まれば、自動的に考えたり行動できたりする。一連の機能を獲得していれば、それを発現することができる。一つは生得的に獲得している機能である。赤ん坊は、生まれた途端に、教わることなくおっぱいを飲むという複雑な行為をやっている。一方、学習して獲得する機能もある。自転車に乗れる人は、乗ろうと思えば乗れるし、ボールを投げようと思えば投げられる。しかし、自分がどうやって乗っているか、どうやって投げているかは分からない。筋肉や神経信号をどうコントロールして、行為に結びつけているのか、などということはまったく分かっていないが、乗ったり投げたりできる。ロボットにやらせるのはものすごく大変だそうだが、人間はこうしたことを無意識に、自動的に行っている。

### ことばを話す・使える

同じように、ことばを話すことも自動的に行って

いる。私も今、話しているが、どうやって話しているかは分からない。頭に浮かんだ考えを、私のもっている機能で自動的に外に出している。伝えようという意思があれば、日本語で出てくる。では日本語を知っているのか。ただ使えるだけじゃないかという気がする。日本語とは何か、それを知っていることと使えることは同じかどうか。

ことばを使うということは、ラベルを用いて意味のやりとりができるということである。意味のやりとりが成立すれば、ことばの機能を実現することができる。会話レベルの言語では、日常生活に困らないレベルで意味のやりとりができる。また、学習レベルのことばであれば、教科学習での意味のやりとりや、自己考察ができる。日常のコミュニケーションから教科学習へと進んでいく中で、子どものもっていることばの意味を、どうやってどこまで深めていけるかが、聾教育の大きな課題である。

#### 機能の使用と強化：学習と言語

人間の身体機能は、適切に繰り返し使用することによって当該の機能が向上する。使わないとその機能は衰える。ベッドに長期間寝ていると、足などの筋力は低下する。言語の使用や思考もこれに近い。使わない知識はどんどん忘れていく。使わない言語は身につかない。知的機能をどのように刺激し、どのように活用させれば、思考機能が高まっていくのか。適切な繰り返しとは。これも、聾学校の指導上の課題である。

#### 自動化：知覚レベル

知覚や思考から概念が形成されると、今度は、知覚や思考が概念に制約される。「r」と「l」の音声は英語の音韻を習得している人には聞き分けられるが、一般の日本人には難しい。音韻を習得していれば強制的にどちらかに判断される。赤から黄色に連続的に変わる色を、どこまで赤と判断するかどうかは、その言語が連続的な色に対してどのような文化的な区分をもっているかによる。

#### 文字認知での枠組み：一部から全体を把握する実験

背景の模様の中に埋もれている文字（ト）の図がある。図は小さい窓を通してそのごく一部が見える。検査を受ける人は窓を動かして全体を探索し、何が書いてあるかを判断する。探索後、その人の視覚的探索を示す視線の軌跡を見ると、明らかに「ト」を辿っているのだが、その人は「ト」だと認識できな

い。予測を伴わないランダムな点の知覚の集合は全体構造の把握に至らなかった。

#### 思考レベルでの枠組み

ハドソンという人が幼稚園児を対象に、鳥と虫の数を比較させたテストがある。質問のしかたで正答率が異なった。鳥は虫よりどれだけ多いか？と聞くと、正答できた子どもは2割ほどだったが、虫を取り合う鳥の競争という話を仕立てて数の違いを聞くと、9割が正答した。後者では、飴の取り合いなど、自分の過去の経験に基づいて課題解決ができた。どう考えればよいか分かれば、つまり、考え方が分かれば思考が機能する。分からなければ考えようと思っても考えられない。

#### 枠組みと推論の誤り：思い込む

推論の誤りの例。「重い荷物を荷車に載せて、一人は前で引っぱり、もう一人は後から押しながら坂を登っている。前の人に『後で押しているのは、あなたの息子か。』と聞くと、『はい。』と答えた。後の人に『前で引っぱっているのはお父さんか』と聞くと、『いいえ。』と答えた。」この答えに違和感を覚えないだろうか。聞き手は、重い荷物を載せて荷車で坂が上がっているという状況から、父と子に違いないという予断をもってしまう。しかし前で引っぱっていたのが母であるとすれば、答えに不自然さはない。既存の枠組みの中でのものを考えてしまうので、一旦思い込んでしまうと、そこから抜け出せない。これは、人間が枠組みで推測するための思い込みによる知覚の偏りである。振り込め詐欺も同じであるが、こちらは情動が絡むので思い込み効果はもっと高い。情動は客観的な思考を鈍らせる。

思考は自動的にスタートするので、どれだけコントロールができるかも問題。的確な推論や誤った推論をしてしまったりする。枠組みは、便利だったり不便だったりする。人間の思考の仕方がそういう特性を持っているので、研究でも日常生活でも考慮する必要がある。

#### 枠組みの習得

指導では、個々のことがらの理解とそれを含む枠組み作りを並行して育てる。全体を意識させながら、部分を教える。出来上がった時の図を頭の中に描きながら、一つ一つのステップの位置づけを自覚して、目的を明確化しながら学習する。それが学習の基本だと思う。

## 学習の道具としての概念・文字言語

思考と言語は一体化していて切り離すことはできない。過去の研究では、切り離して考えようとしたこともあったが、基本的には切り離せない。言語は、世界・外界を知識として整理して捉える道具であり、同時に、それをもとに世界・外界を捉えなおし、新たな知識を得るための道具としての機能をもっている。この機能をどこまで伸ばしていけるかが、幼児から大人まで共通した課題である。

## 発達を支える情動の影響

幼稚園ではことばを教えるとき、まず、知りたい、話したい、感じたいという「気持ち」を育てることが基本となる。ことばが知識と経験の総体だとすれば、経験には必然的に情動が伴っている。その情動の部分が動かないと、知識の習得も進まない。知りたいと思わなければ、ものを考えるという行為へのスイッチが入らない。スイッチが入り、子ども自らがそれに向かって考えたり感じたりすることによって、学習が生じる。大学生や大人でも基本的には同じ。人間は知りたいことしか知ろうとしないし、分からない。知りたくないことは頭に入っていない。

## 教育・学習の環境

情動が安定し、好奇心がわき、話したい、知りたい、人と交わりたいと思う気持ちがわいてくる環境の中で、子どもたちは育ちを実現する。昔から言われており、新しいことではない。教師も子どももそれを求めている。当たり前のことだが、現在では難しくなっている。

## まとめ：人が知るといふこと

今振り返ってみると、人は、夜、懐中電灯を一つ持って暗い森の中を進んでいるようなもののような気がする。足元は見えるが、周りの様子や遠くはよく見えない。私もそんな状況の中を手探りで来たと思う。言語は確かに不確実な道具ではあるが、一方では、ことばを頼りに人は喜んだり悲しんだりする。死にそんな状態でも前向きに生きていけるのは言語の力でもある。いろいろな意味で、人間は言語に助けられたり制約されたりしながら生きている。我々にはすべてが分かるわけではない。たまたま得られた一部の情報で、現実や見えない部分を推測し、同時に、現実に合わせて修正を繰り返しながら、少しずつ適応していく。しかし、現実には合う判断はなかなか難しい。私のこれまでの実験も失敗の連続だっ

た。自分の仮説通りに対象者は行動しない。先日、操縦士が操縦室で自殺して飛行機が落ちた事件があった。9.11のテロのあと客室から操縦室に絶対に入れないようにしたが、それが災いしたという。操縦士の自殺など、まったく「想定外」だったという。人間の考えの制約の例だと思う。経験や現実に合わせて修正していくしかない。知識という枠組みを上手に使うって物事を捉え、判断していくのが専門家であるが、時には、知識という枠組みを捨てて、対象や子どもをあるがままに見つめることが大事だろう。色眼鏡ということばがあるが、そのままのものを見ることは、人間には意外と難しい。

## II ケニア共和国の特別支援教育

JICAとの連携による途上国の支援の一環として、平成27年2月末から3月にかけて、赤道直下のケニア共和国の特別支援教育を視察する機会を得た。私は、ケニアの国情やそこでの人々の生活状況についてはほとんど知識のない状態で行くことになった。したがって、ここで話すケニアの状況や特別支援教育の現状については、私が現地で直接見聞きした範囲に限られている。特に、通常の教育のなかでの障害児教育の状況については、間接的に、限られた情報を得た程度である。アフリカ訪問は初めてであり、事前に、ナイロビはアフリカの中でも、もっとも先進的であると聞いていた。しかし、現地に行ってみると、それまで見聞きした他の外国の状況とは大きく異なり、また、日本との違いにひたすら驚く毎日だった。

共通語はスワヒリ語、通貨はケニアシリングである。一般的な経済的水準は低く、極貧層と言われる人が150万人くらいいるとか。街には若い人があふれているが、ただ立っていたり座っていたりする人も多かった。就職が難しいようだし、仕事を生み出すこと自体も、国の経済状況と関係しているようだった。ナイロビの中心街には、外資系の会社の立派なビルが建っている。外資系の会社が産業の主体となり、本国の産業のなさが、貧しさの要因かとも思われた。ケニアの人が営む店は、日本のお祭りの屋台のようで、細い丸太を組んで屋根にビニールを張った小さなものがたくさんあった。そこでは、日用品から食べるものまで、何でも売られている。国が貧しいんだなあ、ということを感じたが、国の状況は、経済や社会、文化、教育などが総合的に関係しており、教育を支援するといっても、どこからどう支援していけばよいのかという方向性

も掴みにくい。とても悲しいことだと感じた。

## ナイロビ市と郊外の様子

人口は340万人。訪問時は乾期であり、朝夕は涼しく、昼間は陽射しが強いがからっとして、木陰はさわやか。小さな灌木が多く、赤や黄色など鮮やかな色の花が木に咲いていた。バラなどの花の産地で有名である。中心街を少し離れると、ロバや山羊、牛などの動物も生活の中にとけこんで、たくさんいる。ロバが車を引くなど、生活の道具として動物が活躍していた。あちこちの家で洗濯物を、外にひもでつるして干している。ナイロビの中心街から隣の町に向かう道路からは、広い草原や湖、山が見え、自然がとても雄大できれいだった。サルやシマウマも道路の傍らでうろろうしていた。

## 街と人

市内は、トヨタや日産、ホンダなど、日本車の洪水である。交差点は割り込みがすごく、バトル状態。車道は整備されているが、歩道は土で、舗装されていない。基本的に治安がよくなく、銃を持った兵隊さんがあちこちにいる。ケニアのJICA本部で、昼間でもぶらぶら歩いては駄目。夜の移動は近距離でも確かなタクシーを使う。定期的な行動パターンは読まれて危険。写真も、セキュリティ上の問題で捕まるからビルなどはあまり撮らないように、などたくさん注意事項を示されびっくりした。日本ではなんでもない普通のことが安全のために制限されている。見学の時の移動は、外から車内が見えないように、窓に黒いフィルムを貼ったワゴン車。窓も開けてはいけない。一定以上のレベルの人の家は、コンクリートや鉄の柵に囲まれ鉄の門がある。公共施設には必ず門番がいて、身元確認の後、入構可となる。ホテルや病院にも警官等がいて、金属探知機でチェックされる。見学の際の移動では、塀の中のホテルから車に乗り、塀の中の学校で降りる。昼に食事のために建物を出て、レストランまでちょっと歩いた。粗末なシャツやズボンをはいて、壊れかけた靴を履いている人がいる一方では、スーツにネクタイで、スマホを片手に歩いているビジネスマンも結構いた。きれいな洋服を着て、ヘアスタイルもカラー混じりでおしゃれな女性もいた。ナイロビの中心街でも、そういう人々が混在している。貧富の差の大きさは、想像を絶するくらい大きいようだった。市内や郊外のあちこちで道路やビル建築の工事をしていた。建築中のビルは、建築中なのか、壊してい

るのかよく分からない。外壁塗装はなく、コンクリート打ちっ放し。建築中のビルもいつ完成するかははっきりしないとか。国民性なのか、のんき。

衛生レベルが全体的に低く、人々の衛生への意識も低い。ホテルでも蛇口の水は飲めないし、シャワーも口を閉じて水が入らないようにして浴びる。学校など公共の建物でも水洗トイレは、故障していて水が出ないことも多い。私はとうとう体調を崩し、病院に連れて行ってもらった。高齢者ほど弱い。医者が言うには、ケニアの人は、手を洗うという習慣がなく、レストランでも食物に雑菌が入る可能性は高く、バイキング形式はあぶないと。

ナイロビを離れると、状況はまた一変する。町を結ぶ幹線道路は整備されており、かなり走ると隣の小さな町がぽつんと現れる。移動途中にレストランに入ったが、お客さんが食事する場所と、その後ろのお酒や食品が保管してある場所との間には鉄格子があった。現地の人の屋台風のお店に混じってコンクリートブロックの小さな建物があったが、窓には鉄格子。JICAの人に案内してもらった別の食堂は鉄筋建ての大きな店で門番付だった。幹線道路を少し脇に入ると道はでこぼこ。走っていると所々でおばさんたちが野菜などを地べたに広げて売っている。道ばたで、道の穴を埋めたのでお金を下さいという人もいた。

出張前には、予防注射もたくさんしたし、テロでドバイ空港がやられたらまずいよね、エボラ出血熱は大丈夫かなという話もしました。日本では、何の心配もなく水を飲み、なんでも食べられる、町中で荷物をどこでも置けるし、夜も平気で歩ける。こんな暮らしは、ケニアでは、夢のようである。現地では生野菜は食べられない。帰国直後、お店の野菜サンドを買おうと思ったが、一瞬ひるんだ。

## 特別支援教育

教育省の責任者は、インクルーシブ教育を国の方針として推進していると強調する。国の研究所も、それに沿って研究を進めていて、指導層の意識レベルは高い。盲、ろう、知的障害、肢体不自由児の学校を見学できた。施設設備は貧しいが、子ども達の表情は明るく、人なつっこい。ほっとする。敷地内の建物はほとんどが寄付で、入り口の大きな札に「何年にどこの団体が寄付した」と書かれている。炊事場には薪で焚く大きな釜があり、ガスなどはない。子どもたちには給食を提供していた。主食はウガリという、トウモロコシの粉を練って蒸したものと



豆で、野菜は少ない。肉はなかなか食べられないとか。山の中にある学校では、裸足で歩いている子や目の病気のある子がいた。教材や指導が十分とはいえないように思えた。授業は、見せてもらえなかった。JICAの人が見せられないのだと言っていた。話しの端々から、先生たちの職業意識や指導意欲も低いような感じが感じられた。海外青年協力隊のボランティアの人が学校に赴任すると、先生が学校に来なくなるとか。協力隊として教員をしていた人が言うには、月曜から金曜まで毎日勤めたら、とても勤勉だと言われたとか。ケニアの先生はそうではないようだ。ケニアのおおらかな国民性なのか経済的な問題なのか。一方では、とても熱心な先生もいて、個人差が大きいようだ。人、物の配備が平均化されていない。コンピュータが整備されたり、プールがあったりと、ある程度設備の整った学校もあるが、机やイス、簡単な教材くらいしかない学校もあった。公的な予算が足りなく、教育レベルの平均的な底上げは難しく、点での支援や施設整備になってしまう。国費による学校の支援は十分でなく、寄付を頼りに運営している状況では、仕方ないのかと思う。6つくらい学校で話を聞いたが、どこでも、説明の最後に人の支援やお金の寄付をとと言う。JICAの人も「物が無い、足りない、なんとかしてもらえませんか。」という話が多く、指導法をどうするかという話はなかなか出てこない。日本は金持ちだから、ということか。教育省の人たちは、高い意識と新しい考えで国の教育推進をめざすが、教育現場では、教育の質より基本的な資源が足りない状況であった。現場の教員はもっと資源があれば、子どもたちにやってあげられることがたくさんあると言っていた。

教材研究所では、いろいろな種類の指導書、点字や手話に関する書籍があった。特別支援教育関係の入門書を作って、先生たちも勉強する。発達障害関係の指導書もあった。教材は、木で作ったものがほとんどだった。月火水木金などを、色分けして教える教材があった。きれいに色が塗ってあった。

### カンブイろう学校

ナイロビから離れ、山の中のでこぼこ道で揺られた先にある聾学校を尋ねた。校地は赤茶けた山の斜面にあった。学校に着くと、校長先生が子どもたちを外の集会場所に集め、我々を紹介してくださった。手話で指導しているようだ。補聴器装用児もいるとのことだったが、実際につけている子どもは見られなかった。子どもたちは、我々が安全な人間だと分

かると親しげに近づいて来て、手を繋いでくる。身振りで話しかけてくる。職業指導では、ミシンを使って洋服などを作っていた。ミシンの数が足りないが、簡単には買えないとのこと。生徒が作った作品を売り、そのお金で次の材料を買って実習する。寄宿舎は、赤土の斜面に点在していた。調理場には、ガスや水道はない。かまどで調理をする。ここでもウガリという蒸しパンが主食。寄付で得た、溶かして食べる粉の栄養食もあり、肉はあまり食べられないとのことだった。

### ケニアの教育的な課題

障害児教育の対象となる子どもの数や状態など、基礎的な情報や統計がほとんどない。統計を取るための、アセスメントの手法もない。福祉制度が未成熟で、障害児教育制度の前段階である。国の福祉制度や障害児教育を進めるには、150万人の最貧層の人々の福祉や人権としての教育の問題も同時に考えなければならないだろう。就職も大きな課題だが、障害児だけでなく、健常者にとっても厳しい状況のようである。障害児に対する社会や家族の姿勢はまだまだ厳しい状況にある。修学は一般の子どもでも難しいとか。進学テストに受かって中学、高校、大学へとうまく進めれば、エリートとしていい生活ができる。そういう人は少ないようだ。聾学校でも知的障害の学校でも、卒後のフォローは無いようで、子どもたちは卒業後に、こういう職に就いていると、はっきり言った学校はなかった。家庭では健常の子を育てるだけで精一杯で、障害児まで手が回らないというケースもあるとか。卒業年齢を迎えても、家庭が引き取らず、やむなく学校に居続ける25、26歳の生徒もいた。貧困や就職難の結果であろう。

先生は、子どもが学校にいる間に、一生懸命生きる術を教える。その後は、子どもたちがその技術で生きていく。障害児であっても健常児であっても、卒業後は自力で生きていくというのが、ケニアの現状のように思えた。

国の政策と教育現場の状況との解離が感じられた。イギリスの植民地だったので、イギリスに留学して勉強する人も多いという。一方では、スラムに住む人たちが、お金を出し合っただけで子どもを学校に行かせるケースもあると聞いた。学校では、子どもたちが仲よく暮らしている。一生の中で一番楽しい時間をそこで過ごしているんだらうか。そのあとは、どうなっていくのだろうかと思うと、涙が出てくる。一人ひとり、自分で一生懸命生きていくのだというこ

とを感じた。

#### 筑波大学はケニアの教育にどんな支援ができるのか

国の教育レベルを平均的に上げるのは不可能。可能な方法の一つは、モデル事業を起し、特別支援教育の具体的な成果を示すことであろうか。教育によって、障害のある子どもがこんなに変わるのだということを示して、一般の人の意識を少しずつ変える。教育のレベルアップには、経済や文化に対する考えかたの変化が前提となる。日本と比べて、足りないものを持っていくだけでは、支援にはならない。自分の国のことは、自分たちで考え解決していくしかない。極貧層の人であってもそうでなくても、主役は常にその国の人たちである。文化や人の考え方は、外から移植できない。その国の人たちが納得して生きていくのをどう支援すればよいかを、その国の人と一緒に考えるという姿勢が大切だと思う。日本は進んでいる、ケニアは遅れているという問題ではなく、それぞれの国の文化と現状を重んじて一緒に考えていく。例えば、現地で作れるもの、釘と木とペンで作れるもの、そういった教材をどのように活かして指導するのかを一緒に考えることであろう。日本でも現在、特別支援学校から通常の学級へ指導の知識や技術を持ち込もうとするが、通常学級には通常学級としての状況の違いや課題がある。それに

合わせていくことが必要である。そういう意味では、どちらも異文化間交流といえよう。相手の文化を尊重していくことが基本だと思う。

#### 日本の特別支援教育の歴史を振り返れば

我が国の特別支援教育の歴史を振り返ってみると、障害児者への理解が進んだのは、1980年代以降、高度経済成長後のことである。それ以前の時代には、我々の先輩たちも、ケニアと同様に、社会の差別などと戦ってきた。その時代の障害者の就業は今のケニアと近い状態だったのかもしれない。学校ではできるかぎりのことをしたつもりだ。あとはひとりひとりががんばってほしい。それしかできなかった時代の背景があったと思う。日本では先輩たちの大きな努力と国の経済発展により、特別支援教育は少しずつ作られ、新たな価値観も生まれた。教育や文化の形成には時間がかかる。自らの経験を経ずに、外部から理論だけを持ち込んでも、人の心や価値観が簡単に変わるわけではない。また、文字による文化の形成の要因も大きい。日本の文字文化の歴史は長い。ケニアのスワヒリ語には、的確な文字言語がないそうだ。文化の影響力を確実にするためには、文字言語が有効だろう。日本の今の特別支援教育の構築には、日本の文字文化に支えられた価値観があったと思う。